

金屏風の祭典 —黄金の世界へようこそ—

岡田美術館（箱根・小涌谷） 23.12.17～24.06.02

輝く黄金で画面を装った「金屏風」は、空間を晴れやかに演出する調度品であり、国内で幅広く使われるだけでなく、室町時代から幕末に至るまで「日本美術の花形」として諸外国の王に進呈され、明治以降は展覧会出品作の一形式としても発展した。本展は、2019年展覧会と趣向を変えて、当館のコレクションから「金屏風30件」が立ち並び展示室を黄金一色に埋め尽くしている。

<展覧会の構成>

「**金雲の間**」：狩野派が得意とした力強い金雲や、大和絵風の雅やかな金雲など、様々な金色の雲が巡る。

「**金銀の間**」：銀箔や銀砂子が組み合わされた金屏風が落ち着いた雰囲気を作りだす。

「**金地の間**」：金箔におおわれた総金地の屏風が光沢を放ち、「光琳風」や「近代の屏風」のコーナーへと展開をする。

最後は、金屏風の伝統を現代につなぐ日本画家「福井江太郎」氏（1969～）が、2023年5月に大勢の観客を前に、たった15分で描き上げた渾身の「金屏風」がお披露目される。



尾形光琳 《菊図屏風》(部分)

18世紀初頭 紙本金地着色

大画面の金地に大輪鱗の白菊が揺れていて、白・緑・黒と金という限られた色だけで優美に咲き誇る「菊の花」を描いた名品である。



尾形光琳 《燕子花（かきつばた）

図屏風》(部分) 19世紀中頃 国宝

ほぼ等身大の燕子花のみを金地屏風に描き出した、颯爽とした気分に溢れた野心作である。花の部分が全く同じのため、同一の型紙を使用した意匠的構成も見どころである。

右隻の右から一番目と三番目、左隻の右から一番目と二番目は、夫々花の部分が全く同じなので、同一の型紙を使ったものと推測される。